

日本語テキスト分析

2008年度冬学期 月曜1限 三角洋一先生担当

源氏物語

「桐壺帝」の子でありながら側室の子であるため、臣籍降下し「源氏」の姓を賜った、光源氏の挫折と栄光を描き出す、全五十四帖の物語。三部から構成されており、第一部と第二部の、光源氏が主人公の正編と、第三部の主人公・薫君（光源氏の息子）の続編に分けられる。

源氏物語の三部構成

第一部…「桐壺」から「藤裏葉」まで。光源氏の出生・栄光・挫折・復帰を描く

第二部…「若菜」から「幻」まで。女三宮を正妻に迎えた光源氏の苦悩を描く

「桐壺」から「幻」までの四十一帖で、光源氏の一生を描き出す

第三部…「匂兵部卿」から「夢浮橋」まで。「匂宮三帖」と「宇治十帖」で構成される

源氏物語の年譜

一〇〇〇頃 紫式部によって「源氏物語」が著される

仮名文字の発展や伊勢、竹取物語の影響がみられる

「紫式部日記」の記述によると…藤原道長の娘である中宮影子は、御子（後の後一条帝）を出産。近々一条帝の待つ内裏に還御する予定の影子は、紫式部に内裏に持参する土産に御冊子（↓これが源氏物語）つくりを命じた。

道長や今任も源氏物語を読んでいた

一〇三〇頃 「更級日記」

一〇〇八年に作者菅原孝標娘が生まれ、作者十二歳の時父と上総へ下る。

五十数巻の源氏物語の存在が示されており、この頃には「源氏物語」は完成していた

* 平仮名の成立で男性知識人が女性のために物語を作るだけでなく、女性自身によって自然への感性、心理描写が育まれていった。このことが女性による物語の批判、女性による物語の創作へつながった。

一一〇〇頃 （堀河朝）公の場で「源氏物語」が議論されるようになる。

物語は蔑視されていたが、徐々に風潮が変化。後に藤原俊成が歌人必読の書とする。

古注（貴族による注）の時代

一一七〇 世尊寺伊行「源氏釈」…注釈の始まり

彼は藤原行成の子孫で、また建礼門院右京大夫の父である。

一二〇〇 藤原定家「奥入」

「源氏釈」を土台にする。当時の段階で「源氏物語」に読みにくい箇所が多く、何の歌（和歌、漢詩、催馬楽）を引いているか（引歌表現）などが書かれている。

醍醐帝、村上帝の時期の公家の日記には「源氏物語」のエピソードのもととなった行事もみられたようで、有職故実の書としての「源氏物語」ともなる。

一二九〇 素寂「紫明抄」

「奥入」を土台とする。題名の紫は紫の上、明は明石の君をそれぞれさす。物語のエピソードが何に基づくかを追加していった考証、準拠（事実をふまえて物語に加える）を重視した注釈書。「源氏物語」を延喜、天暦の時代に題材を求めた時代物語としても読める。宇多天皇による戒めや、紀貫之がこの物語に登場している。

- 素寂は源光行の子である。源光行とその子孫（光行、親行、行阿の三代）は河内本を編纂したことで有名。源光行は高名な漢学者で、実朝の勉強ついでに和歌を学ばせようとした人物である。（ゆえに素寂も鎌倉で研究し、その成果が前述した「紫名抄」である。）光行は様々な「源氏」を読み、比較した。なお「河内本」の名は光行が河内守であったことに由来する。

一三六二 四辻善成「河海抄」

今までの注釈を全てまとめたもの。なお彼は天皇の孫であり、内大臣までなる。

旧注（学者による注）の時代

…旧注の特徴としては、貴族だけでなく連歌師も注釈をつけるようになったこと

一四七二 一条兼良「花鳥余情」

応仁の乱の時、息子のいる興福寺に逃げ込んで著す。

一五二〇 宗祇、肖柏「弄花抄」

一五二八 三条西実隆「細流抄」

宗祇に古今伝授を受けた貴族で、「弄花抄」にも参加している。

当時「源氏物語」は連歌の参考書としても読まれ、注釈は文脈理解、鑑賞のためのものとなる。

* 室町時代以降、定家の校訂した「青表紙本」が多く出回り、「河内本」を圧倒した。

一六七三 北村季吟「湖月抄」

今までの膨大な「源氏物語」の注釈をコンパクトにまとめ、出版したもの。

新注（一般人による注）の時代

一六九六 契沖「源註拾遺」

「湖月抄」に基づいての、注の訂正、追加

一七九六 本居宣長「玉の小櫛」

* 賀茂真淵や萩原広道らも注釈書の作成をしている。特に萩原の注は最初の部分しかできていないものの、数多ある注釈の中で最も優れているといわれている。

近代注

以降の注は近代注と呼ぶ。

＊ 古注、旧注、新注という語は仏教学に由来する。仏教教典の翻訳を翻訳がなされた時代によつて古訳（後漢、魏晉南北朝）
くやく
旧訳（唐の玄奘以前の文語的な訳）、新訳（玄奘以後の口語による訳）に分類されているのだ。

宇治十帖

宇治十帖とは、光源氏の死後の物語。

源氏の息子（本当は違うけど）の薫と、源氏の孫の匂宮が中心となつて展開。橋姫、夢浮橋の計十帖からなる。帖とは冊子本の数え方で、卷子本だと巻となる。

勾宮三帖

宇治十帖にはいる前の勾宮・紅梅・竹河の三帖で今後の物語の構想を練る（十帖へのつなぎの役割）

勾宮……勾宮と薫の元服とかの話。

紅梅・源氏のライバル頭中将の跡取りの話。

竹河・・・頭中将と夕顔の子である玉鬘のその後の話。

宇治十帖

主要な登場人物紹介

薰（右大将）

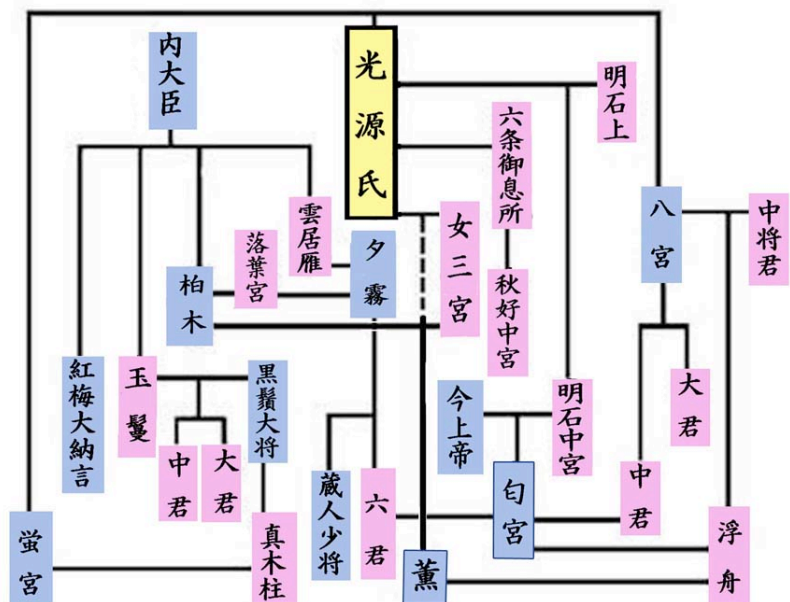
宇治十帖の主人公。女三の宮と柏木との間の不義の子。物静かで誠実、厭世的な面も。勾宮と対照的で、世間体を気にしてできる限りなだらかに振る舞おうとしている。当時の人々は道徳を大切にしていたので、鎌倉時代の評論書にも、薫に欠点の一つもないと書かれている。でも結構腹黒い。また、坊ちゃんなので詰めが甘い。

勾宮

好色家で今上の子とは思えないほどの行動力。確実に光源氏の血をひいている。

宇治の八の宮

桐壺院の第八皇子で、故朱雀院や源氏の異母兄弟だが、政争に敗れ宇治でひっそり暮らす。優婆塞の宮とも呼ばれ、仏道修行に励み、そ



の縁で薫と知り合いに。二人娘思いのいい親父だが、妻の死に傷心して妻方の親戚の中將の君（浮舟の母）に手を出し、飽きたら捨てるという結構ひどいおっさん。

宇治の大君

八の宮の長女。早くに母を亡くしたので妹の母親的存在でもある。薫に惚れられるが断る。

中の君・中の宮

妹のほう。薫の策略で匂宮と結婚。物語当初は中の君が薫と匂宮の板ばさみとなり自殺する予定だったが、その代わりに浮舟という存在が生み出される。

浮舟

大君・中の君の異母姉妹。ついてない。身分は高くない。自殺未遂を起こし最終的に出家。

大輔の君

二条院側の中の君のお付の最高責任者

弁の尼

大君・中君の後見人。中の君が都に出てからも宇治に留まる。

右近

浮舟の付き人。

（系図は <http://homepage1.nifty.com/WAKOGENJI/sonota/keizu3.jpg>）

あらすじ（第二部：匂宮〜夢浮橋）

（<http://daijirin.dual-d.net/extra/genji.html>）

「匂宮」巻は「光隠れたまひし後」と書き出され、物語は源氏の次代に移っている。薫はすでに十四歳、匂宮（明石姫君腹。源氏の孫にあたる）とともに世に並び称される貴公子だが、自分の出生への疑念に苦しんでいた（42匂宮）。若くして出離の志を持ち、宇治に隠棲する俗聖八の宮を慕って宇治に通ううちに、宮の娘大君と中君を知り、なかでも大君に強く惹かれてゆく（45橋姫）。八の宮の没後、大君にその思いを訴えるが、父の遺戒を守る大君は薫の愛を固く拒み、自分の代わりに薫と妹を結婚させようとする。大君の考えを知った薫は、匂宮を中君に通わせるが、今上帝の三の宮である匂宮は、夕霧大臣家に六の君の婿として迎えられることになった。裏切られた思いの大君は、不信と屈辱感のうちに死去する（46椎本）（47総角）。大君を忘れない薫は、中君を匂宮に譲ったことを後悔するが（48早蕨）、中君から大君に似た異母妹浮舟の存在を聞き知り（49宿木）、亡き大君のゆかりとして宇治に住ませた（50東屋）。しかし、匂宮も浮舟に関心を持つと、薫の目を盗んで宇治を訪れ、強引で情熱的な仕方で、浮舟を自分のものにしようとする。ふたりの貴公子の板ばさみとなった浮舟は、ひそかに宇治川への入水を決意する（51浮舟）。人々は浮舟が失踪した事を悲しむ（52蜻蛉）。失踪後、倒れているところを横川の僧都に助けられた浮舟は、再び現世の愛欲の世界に戻ることを恐れて、僧都に懇願して出家を果たし、仏道修行の日々を送る（53手習）。浮舟生存を知った薫は、浮舟の弟を使者に遣わすが、浮舟は会おうとさえしなかった（54夢浮橋）。

☆今回の授業では、蜻蛉（特にp114以降）について焦点を当てる

蜻蛉

第五十二帖。第三部の一部「宇治十帖」の第八帖にあたる。巻名は薫が宇治の三姉妹との因縁を想い詠んだ和歌「ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへもしらず消えしかげろふ」に因む。

蜻蛉のあらすじ

薫二十七歳のころの話。

浮舟の姿が見えないので、宇治の山荘は大騒ぎとなる。浮舟の内情を知る女房は、浮舟が宇治川に身を投げたのではと思惑う。かけつけた浮舟の母中将の君は真相を聞いて驚き悲しむ。世間体を繕うため、遺骸もないままにその夜のうちに葬儀を営んだ。そのころ石山寺に参籠していた薫は、野辺送りの後に初めて事を知った。

匂宮は悲しみのあまり、病と称して籠ってしまふ。それを耳にした薫は、浮舟のことは匂宮との過ちからだと思信するが、浮舟を宇治に放置していたことを後悔、悲しみに暮れる。宇治を訪れた薫はここで浮舟の入水をはじめて知り、悲しみに沈む中将の君を思いやつて、浮舟の弟たちを庇護する約束をして慰めた。★薫は浮舟の四十九日の法要を宇治山の寺で盛大に営んだ。中の君からも供え物が届けられ、浮舟の義父常陸介は、このときはじめて継娘の素性が自分の子たちとは比較にならないものだったと実感した。

夏、匂宮は気晴らしに新しい恋をはじめ。一方、薫はたまたま垣間見た女一宮（母は明石の中宮。薫の正妻である女二の宮の異母姉）に憧れるようになる。妻の女二の宮に、女一の宮と同じ装いをさせたりしますが、心は晴れない。そのころ、故式部卿宮（光源氏・八の宮の兄弟）の姫君が女一宮に出仕し、宮の君と呼ばれていた。東宮妃となるべく育てられかつては薫との縁談もあったこの女房に、薫も同情しつつも関心を持ちはじめ。それにつけても、薫はやはり宇治の姫君たちが忘れられず、夕暮れに儚げに飛び交うカゲロウをながめながら、大君・中の君・浮舟を追想した。

当時の結婚観

この時代の結婚は、男性は夜に妻の実家へ通う通い婚が主流。匂宮は六の君には婿通いし、その実家の後ろ立てを受けているので頭が上がらない。だが中の君の場合、匂宮は二条院の自分の屋敷に引き取り据えているため、女性のほうからすると立場がないし、匂宮の愛情次第でどうにでもなるといふ不安定な位置にある。

薫と浮舟のように身分差がある場合は、世間の目もあるから乳母の家などに隠し据えることがある。更に身分が低い場合には召人（めしうど）として側に置くこともある。

※結婚の形は女性中心。系図は男性中心。

以降本文に入ります。訳は<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>からのコピーです m(_ _)m

二七、四十九日の法事

四十九日のわざなどせさせたまふにも、「いかなりけむことには」と思せば、とてもかくても罪得まじきことなれば、いと忍びて、かの律師の寺にてせさせたまひける。六十僧の布施など、大きにおきてられたり。母君も来ゐて、事ども添へたり。宮よりは、右近がもとに、白銀の壺に黄金入れて賜へり。人見とがむばかり大きなわざは、えしたまはず、右近が心ざしにてしたりければ、心知らぬ人は、「いかで、かくなむ」など言ひける。殿の人ども、睦ましき限りあまた賜へり。「あやしく。音もせざりつる人の果てを、かく扱はせたまふ。誰れならむ」と、今おどろく人のみ多かるに、常陸守来て、主人がり居るなむ、あやしと人びと見ける。「少将の子産ませて、いかめしきことせさせむ」とまどひ、家の内になきものはすくなく、唐土新羅の飾りをもしつべきに、限りあれば、いとあやしかりけり。この御法事の、忍びたるやうに思したれど、けはひこよなきを

見るに、「生きたらましかば、わが身を並ぶべくもあらぬ人の御宿世なりけり」と思ふ。宮の上も誦経したまひ、七僧の前のことせさせたまひけり。今なむ、「かかる人持たまへりけり」と、帝までも聞こし召して、おろかにもあらざりける人を、宮にかしこまりきこえて、隠し置きたまひたりける、いとほしと思しける。

(薫は) 四十九日の法事などもおさせになるにつけても、「(浮舟は) いったいどういうことになったのか」とお思いになるので、生きていても死んでいるにしても罪になることではないから、たいそうこつそりと、あの律師の寺でおさせになった。六十人の僧のお布施など、大がかりに仰せつけになっていた。母君も来ていて、お布施を加えた。匂宮からは、右近のもとに、白銀の壺に黄金を入れて賜った。人が見咎めるほどの大げさな法事は、おできになれず、右近の志として催したので、事情を知らない人は、「どうして、このような」と言った。薫の家人どもで、気心の知れた者ばかり大勢お遣わしになった。「不思議なこと。噂にも聞かなかった方の法事を、こんなに立派にあそばす。いったい誰であろう」と、今になって驚く人ばかりが多かったが、常陸介が来て、主人顔でいる(※浮舟の養父というだけでなく、薫からの後援があるという頼もしさも加わって、得意然とする)ので、変だと人びとは見るのだった。「少将が子を産ませて、盛大なお祝いをさせよう」と大騒ぎし、邸の中にない物は少なく、唐土や新羅の装飾をもちたいのだが、限界があるので、まことにお粗末な有様であった。この御法事が、人目に立たないようにと(薫は) お思いであったが、感じが格別であるのを見ると、「もし生きていたらどんなにかと、わが身に比肩できない方のご運勢であったなあ」と思う。中君も、誦経をなさり、七僧への饗応の事もおさせになった。今になって、「このような人を持っていたのだ」と、帝までが思し召して、並々ならず大切に思っていた人を、女二宮(薫の正妻)にご遠慮申して隠していらしたのを、お気の毒にと思ひになった。

四十九日

死後四十九日の間を仏教では中陰(中有)の期間と呼び、六道輪廻の間をさまよう。

六道輪廻の思想により、人の没後四十九日目に、次に六道中のどの世界に生まれ変わるかが決まる、と考えられていたため、最後の裁判を迎える四十九日の法要は、遺族による追善供養による功德を死者に振り向け、死者がよりよいところに生まれ変わるように、盛大に行われる。

六道

仏教において迷いあるものが輪廻するという、六種類の迷いある世界のこと。

- ・天道(てんどう)
- ・人間道(にんげんどう)
- ・修羅道(しゅらどう)
- ・畜生道(ちくしょうどう)
- ・餓鬼道(がきどう)
- ・地獄道(じごくどう)

地獄から畜生までを三悪道(あるいは三途)と呼称し、これに対し修羅から天上までを三善道と呼称する。

二八、その後の匂宮と薫

二人の人の御心のうち、古りず悲しく、あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては、いといみじければ、あだなる御心は、慰むやなど、こころみたまふこともやうやうありけり。

かの殿は、かくとりもちて、何やかやと思して、残りの人を育ませたまひても、なほ、いふかひなきことを、忘れがたく思す。

二人（薫と匂宮）のお方のご心中は、いつまでも悲しく、あいにくな横恋慕の最中に亡くなってしまつては、ひどく悲しいが、（匂

宮の）浮気なお心は、慰められるかなどと、他の女に言い寄りなすることもだんだんとあるのだった。

薫は、このようにお心にかけて、何やかやとご心配なさつて、残つた人をお世話なさつても、やはり、言つて効のないことを、忘れがたくお思いになる。

薫と匂宮の性格の対照性

あだなる御心は慰むやなどこころみたまふこともやうやうありけり↓匂宮の好色な性格。

いふかひなきことを忘れがたく思す↓薫の性格。

二九、一品の宮づきの小宰相と薫

後の宮の、御軽服のほどは、なほかくておはしますに、二の宮なむ式部卿になりたまひにける。重々しうて、常にしも参りたまはず。

この宮は、さうさうしくものあはれなるままに、一品の宮の御方を慰め所にしたまふ。よき人の容貌をも、えまほに見たまはぬ、残り多かり。

大將殿の、からうして、いと忍びて語らはせたまふ小宰相の君といふ人の、容貌などもきよげなり、心ばせある方の人と思されたり。同じ琴を掻きならす、爪音、撥音も、人にはまさり、文を書き、ものうち言ひたるも、よしあるふしをなむ添へたりける。

この宮も、年ごろ、いといたきものにしたまひて、例の、言ひ破りたまへど、「などか、さしもめづらしげなくはあらむ」と、心強くねたきさまなるを、まめ人は、「すこし人よりことなり」と思すになむありける。かくもの思したるも見知りければ、忍びあまりて聞こえたり。

（小宰相）「あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経る

代へたらば」と、ゆゑある紙に書きたり。

ものあはれなる夕暮、しめやかなるほどを、いとよく推し量りて言ひたるも、憎からず、

「常なしとこら世を見る憂き身だに人の知るまで嘆きやはする

このよろこび、あはれなりし折からも、いとどなむ」など言ひに立ち寄りたまへり。いと恥づかしげにものものしげにて、なべてかやうになどもならしたまはぬ、人柄もやむごとなきに、いとものはかなき住まひなりかし。局などいひて、狭くほどなき遣戸口に寄りゐたまへる、かたはらいたくおぼれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにものなども聞こゆ。

「見し人よりも、これは心にくきけ添ひてもあるかな。なとて、かく出で立ちけむ。さるものにて、我も置いたらましものを」と思す。人知れぬ筋は、かけても見せたまはず。

後の宮が、御輕服の間は、やはり里下がりしていらつしやるうちに、二の宮が式部卿におなりになった。重々しくなつて、常には参上なさらない。この宮は、もの寂しくて何となく悲しい気分のまま、一品の宮のお側を慰め所としていらつしやる。器量の良い女房の顔で、まだよく御覽にならない者が、多く残っていた。

大將殿が、やつとのこととて、たいそうこつそりと親しくなさっている小宰相の君という女房で、器量なども美しげで、氣立ての良い人とお思ひであつた。同じ琴をかき鳴らす、その爪音や、撥の音が、誰にもまさつて、手紙を書き、何か言うのも、風流な事が加わつてゐるのだつた。

この宮も、長年、とても関心を寄せていらつしやつて、いつものように、悪口おつしやるが、「どうして、そのようにありふれた女でいようか」と、氣強くて従わないのを、真面目人間は、「少しは他の女と違つてゐる」とお思ひなのであつた。このように物思ひに沈んでいらつしやるのを知つていたので、思ひ余つて差上げた。

「お悲しみを知る心は誰にも負けませんが

一人前でもない身では遠慮して消え入らなばかりに過しております

亡くなつた方と入れ替れるものでたら

と、由緒ある紙に書いてあつた。何となくしみじみとした夕暮で、しんみりした時に、まことによく推察して言つて來たのも、氣が利いてゐる。

「無常の世を長年見續けて來たわが身でさえ

人が見咎めるまで嘆いてはいないつもりでしたが

このお見舞いのお札には、悲しい折柄、ひとしお嬉しかった」

などと言ひに立ち寄りなかつた。たいそう氣恥ずかしくなるほど堂々として、普段はこのようにはお立ち寄りなさらず、人柄もご立派なのに、たいそうささやかな住まいである。局などと言つて、狭く何程もない遣戸口に寄つていらつしやるのは、体裁悪く思われるが、そうは言つてもむやみに卑下することもなく、とても良い具合にお話など申し上げる。

「亡き人よりも、この人は奥ゆかしい感じが加わつてゐるな。どうして、このように出仕したのだろう。そのような人として、わたしも側に置いたらよかつたものを」

とお思ひになる。密やかな心の内は、少しもお見せにならない。

結婚

親同士の合意↓三日間連続で夫が「通う」↓披露宴

※人が通うのだが、「住む」と言う

正式な結婚をしない場合は、「忍び通う」

その状態で永く関係が続けたい場合は「(隠し)据う」

↓匂宮は、堂々と自分の家に中の君を迎える

- ・「通う」「忍び通う」↓男女対等
 - ・「据う」「隠し据う」↓男＞女
 - ・「召す（召人）」…自分や母、姉妹の使用人として雇って情けをかける
- 例…和泉式部日記

・「御車賜う」…世間に知られては困る場合に、人目につかないよう、部下の車を女性を迎えにやる。
女性を軽んじている。

三〇、中宮、六条の院で法花八講

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条の院の御ため、紫の上など、皆思し分けつつ、御経仏など供養せさせたまひて、いかめしく、尊くなむありける。五巻の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきて参りて、物見る人多かりけり。

蓮の花の盛りに、法華八講が催される。六条院の御ため、紫の上などと、皆それぞれに日をお分けになって、お経や仏などを供養あそばして、莊嚴に、立派に催された。五巻目の日などは、大変な見物だったので、あちらこちら、女房の縁故をたどって、見物に来る人が多かった。

法花八講

『法華経』八巻を八座に分け、朝夕一座ずつ四日間で読誦・講讃する法会。八巻八座のほか、開結二経（無量義経と観普賢菩薩行法経）を加えて十座であり、十講と呼ぶが、これを八講と称する事もある。

書物の形態で一番高級なのは、「巻物」の形態

法華三部経

- ・開経…『無量義経』二巻
- ・本経…『法華経』一部八巻二十八品（法華七喻）
- ・結経…『観普賢菩薩行法経』一卷

ついでに、仏教知識

- ・釈迦三尊…釈迦如来を中尊として、脇侍として左に騎獅の文殊菩薩、右に乗象の普賢菩薩を配置するのが一般的（この場合の「左」「右」とは中尊から見た「左」「右」を指す。）
- ・阿弥陀三尊…阿弥陀如来を中尊とし、観音菩薩を左脇侍、勢至菩薩を右脇侍とする三尊形式
- ・薬師三尊…薬師如来を中尊とし、日光菩薩を左脇侍、月光菩薩を右脇侍とする三尊形式

法華八講の起こり

『三宝絵』という書物によると…

奈良時代、石淵寺に勤操いんさうという僧侶がいた。勤操の同門の栄好は親孝行で、僧として支給される食物をさいて、年老いた母のもとに届けていたわつていた。ところが、栄好は病で死んでしまった。栄好に仕えていた童子が泣き悲しんでいるのを聞いた

勤操は、「お母さんは老齢で、息子が死んだ事を知ったら泣き悲しんで死んでしまうかもしれないから、黙っていなさい。これからは私の食事を分け与えるようにしよう。」と言って、榮好の母に榮好の死を知らせずに、毎日、童子に食物を運ばせていた。ところが、あるとき友人とつい話し込んでいるうちに、食事を持っていかせるのを遅れてしまった。母は、「いつも通りの時間に食事が取れなくて悲しい。息子はなにがあつたのか、怠慢だ」と怒った。その時、童子が「実は息子さんは既に亡くなつてしまつていて、親友の勤操さんがこうしていたんです」と言つてしまった。母は「自分の息子が死んだのもわからなかつたのか」と悲しんで、やがて母も亡くなつた。

勤操は榮好母子の供養のために、石淵寺で法華経を講じ、四日間、朝座、夕座の二座を勤めて、追善供養をしたと伝えられる。

これが、現在も行じられる法華八講（経一卷を一座として、法華経八巻を八座で完結させる法要）の起りといわれる。

法華八講のやり方（注と異なる三角説）

僕（三角先生）は：第一日は朝座に第一巻から行い、第五日の朝座で、開結二経を勤めた、と考えている

（開結二経は添え物の扱い）

第五巻の日

Ⅱ第3日目の朝座（午前中）

第五巻の冒頭は、『提婆達多品第十二』である。

提婆達多は、釈迦仏のいところで、弟子になつたが、後に違背し、分派行動をとつたとされる悪人である。

・提婆達多品の前半：悪人往生

提婆達多は釈迦を殺そうと石を投げ、傷を付ける程の悪人であり、提婆達多は死後無限地獄に堕ちる。だが、無限地獄の期間が終われば、やがて成仏するであろう、と釈迦は予言している。

実は、前世において、釈迦はある国の国王であり、提婆達多は阿私仙人であつた。釈迦はこの阿私仙人を師として法華経を修行した（二千年間）。

●薪の行道

法華八講の第8日に、「法華経をわが得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」（『拾遺集』哀傷）の歌を唱えながら、薪や水桶を持ち、捧物を持つて、本尊仏の周囲を廻り歩く行道。歌は提婆達多品中に、仏が法華経を得るため「水を汲み、薪を拾い、食を設け」て、阿私仙に従つたとあるのに基づく。（『三宝絵』に描写）

・提婆達多品の後半：女人往生、畜生往生

法華経によつて修行し得道したわずか八才の龍女の成仏を明らかにする。女人には五障があつて、梵天・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身を得ることは出来ないはずであるが、法華経の経力によつて八才の龍女が、たちどころに男子の身に変わり（変成男子）、成仏することが説かれ、女人も等しく成仏できる事を語る

※仏教の女性観 薬王品には、「薬王菩薩本事品（薬王品）を聴き受持するならば、次の世に女人に生まれることはない」など、女性に対する偏見がみられる

五障三従 女性に加えられた五種のさわりと三種の忍従。女性は梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身になれない

ことを五障といい、三従とは幼いときは父（親）に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従うもので、

女性は従属的地位にあり、指導者になれないと規定したこと

↓提婆達多品は唯一、女性の成仏の可能性を述べている。

女房

女房の「房」は「部屋」の意味で、女房は「女官の部屋」という意味であった。

平安中期以降、女房は女官の部屋の意味から、私室を与えられた高位の女官、貴人邸に仕える上級の侍女をさす言葉となった。

・宮仕え人（宮仕えをする人。宮中に奉公する人）⇕里人（宮仕えに出ないで、里にいる者）

・御達^{ごたち}…宮中・貴族の家に仕える上級の女房たちを敬つていう語

・乳母…貴人の子供に対して、生母に代わって授乳し、またその後の養育に大きく関わる女性

年齢での分類

宮中や貴族邸に仕えて、身の回りの事などをする…女^め童^{のわらわ}↓若^わ人^{こうど}↓大^お人^{とな}

雑用をつとめる…半^は者^{した}↓下^{しも}仕^づえ

ランクでの分類

出身の階級や身分によって、「上臈（じょうろう）」「小上臈」「中臈」「下臈」に大別された。（ちなみに清少納言は中臈）

※女性の官職については『女官通解』（浅井虎夫著、学術文庫）。男性の官職については『官職要解』（和田英松）

三二、西の渡殿の女一の宮を、薫すき見する

五日といふ朝座に果てて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改むるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつくろふほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き極じて、女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少ななる夕暮に、大將殿、直衣着替へて、今日まかづる僧の中に、かならずのたまふべきことあるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかぬれば、池の方に涼みたまひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立てて、うちやすむ上局にしたり。

「ここにやあらむ、人の衣の音す」と思ひて、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例さやうの人のみたるけはひには似ず、晴れ晴れしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立て違へたるあはひより見通されて、あらはなり。氷をものの蓋に置きて割るとて、もて騒ぐ人びと、大人三人ばかり、童と居たり。唐衣も汗衫も着ず、皆うちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着替へたまへる人の、手に氷を持ちながら、かく争ふを、すこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。

いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたに靡かして引かれたるほど、たとへむものなし。「こころよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけり」とおぼゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞするを、思ひ静めて見れば、黄なる生絹の単衣、薄色なる裳着たる人の、扇うち使ひたるなど、「用意あらむはや」と、ふと見えて、

（女房）「なかなか、もの扱ひに、いと苦しげなり。ただ、さながら見たまへかし」とて、笑ひたるまみ、愛敬づきたり。声聞くにぞ、この心ざしの人とは知りぬる。

心強く割りて、手ごとに持たり。頭にうち置き、胸にさし当てなど、さま悪しうする人もあるべし。異人は、紙につつみて、御前にもかくて参らせたれど、いとうつくしき御手をさしやりたまひて、拭はせたまふ。（女一の宮）「いな、持たらじ。雪むつかし」とのたまふ御声、いとほのかに聞くと、限りもなくうれし。「まだいと小さくおはしまししほどに、我も、ものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの稚児の御さまや、と見たてまつりし。その後、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神仏の、かかる折見せたまへるならむ。例の、やすからずもの思はせむとするにやあらむ」と、かつは静心なくて、まもり立ちたるほどに、こなたの対の北面に住みける下臈女房の、この障子は、とみのことにて、開けながら下りにけるを思ひ出でて、「人もこそ見つけて騒がるれ」と思ひければ、惑ひ入る。この直衣姿を見つくるに、「誰ならむ」と心騒ぎて、おのがさま見えむことも知らず、簀子よりただ来に來れば、ふと立ち去りて、「誰れとも見えじ。好き好きしきやうなり」と思ひて隠れたまひぬ。

この御許は、「いみじきわざかな。御几帳をさへあらはに引きなしてけるよ。右の大殿の君たちならむ。疎き人、はた、ここま來べきにもあらず。ものの聞こえあらば、誰れか障子は開けたりしと、かならず出で來なむ。単衣も袴も、生絹なめりと見えつる人の御姿なれば、え人も聞きつけたまはぬならむかし」と思ひ極じてをり。かの人は、「やうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめて、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな。そのかみ世を背きなましかば、今は深き山に住み果てて、かく心乱れましや」など思ひ続けるも、やすからず。「などて、年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらむ。なかなか苦しう、かひなかるべきわざにこそ」と思ふ。

五日という朝座で終わって、御堂の飾りを取り外し、お部屋の飾りつけを改めるので、北の廂も、襖障子なども外してあったので、皆が入り込んで整えている間、西の渡殿に姫宮はいらっしゃった。お経を聞き疲れて、女房たちもそれぞれの局にいて、御前はたいそう人少なな夕暮に、大將殿は、直衣に着替えて、今日退出する僧の中に、是非にお話なさらない事があったので、釣殿の方いらっしゃったが、皆が退出してしまつたので、池の方で涼みなさつて、人も少ないので、さきほどの小宰相の君などが、仮に几帳などを立てて、ちょっと休むための上局にしていた。

「ここであろうか、衣ずれの音がする」とお思ひになって、馬道の方の襖障子が細く開いているところから、そつと御覧になると、いつもそのような女房がいる感じと違って、広々と整頓されているので、かえつて、几帳などがいくつもはすに立ててあつて見通されて、丸見えである。

氷を何かの蓋の上に置いて割ろうとして、騒いでいる女房たち、大人三人ほどと、童女とがいた。唐衣も汗衫も着ず、みな打ち解けていたので、御前とはお思ひでないが、白い薄物のお召物を着ていらっしゃる人で、手に氷を持ちながら、このように騒いでいるのを、少しほほ笑んでいらっしゃるお顔、何とも言いようもなくかわいらしげである。

ひどく暑さの堪えがたい日なので、うるさい御髪が、暑苦しくお思ひなされるのであろうか、少しこちら側に靡かして引いている様子、何物にも譬えようがない。「大勢美しい女性を見て來たが、似ている人は誰もいないなあ」と思われる。御前の女房は、まこと土人形のような気がするのを、冷静になつて見ていると、黄色い生絹の単衣に薄紫色の裳を着ている女で、扇をちよつと使つてい

ろなど、「いかにも嗜みがあるなあ」と、ふと見えて、

「かえって、氷を扱うのに、とても暑苦しそうです。ただ、そのまま御覧なさい」

と言って、につこりしている目もと、愛嬌がある。声を聞くと、この目指している女と分かった。

無理して割って、それぞれの手に持っていた。頭の上に置いたり、胸に当てたりなど、体裁の悪い恰好をする女もいるのであろう。他の人は、紙に包んで、御前にもこのようにして差し上げたが、とてもかわいらしいお手を差し出しなざって、拭わせなさる。

「いえ、持てません。雫が嫌です」

とおつしやるお声、とてもかすかに聞くのも、この上なく嬉しい。「まだとても幼くいらしたときに、わたしも、何も分からず拝見したとき、何とかかわいらしい姫宮か、と拝見した。その後は、まったく姫宮のご様子をさえ聞かなかったが、どのような神仏が、このような機会をお見せになったのであろうか。いつもの、心安からず物思いをさせようとするのであろうか」

と、一方では落ち着かず、じっと見つめて佇んでいると、こちらの対の北面に住んでいた下臈の女房が、この襖障子は、急ぎの用事で、開けたままで下りて来たのを思い出して、「人が見つけて騒いだら大変だ」と思ったので、あわてて入って来る。

この直衣姿を見つけて、「誰だろう」とびつくりして、自分の姿を見られることも構わず、簀子からずんずんやって来たので、ふと立ち去って、「誰とも知られまい。好色なようだ」と思って隠れなざった。

この女房は、

「大変なことだわ。御几帳までを丸見えにしていたことだわ。右の大殿の公達であろうかしら。疎遠な方は、また、ここまでは来るはずがない。何かの噂が立ったら、誰が襖障子を開けていたのだろうか、きつと出て来るだろう。単衣も袴も、生絹のように見えただ方のお姿なので、誰もお気づきになることができなかっただろう」

と困りきっていた。

あの方は、「だんだんと聖になって来た心を、一度踏み外して、さまざまに物思いを重ねる人となってしまったなあ。その昔に出家遁世してしまったら、今は深い山奥に住みついて、このような心を乱すことはないものを」などとお思い続けるにつけても、落ち着かない。「どうして、長年、お顔を拝見したものだと思っていたのであろう。かえって苦しいだけで、何にもならないことであるのに」

と思う。

寢殿造の構造

寢殿（正殿）と呼ばれる中心的な建物が南の庭に面して建てられ、東西に対屋と呼ばれる付属的な建物を配し、それらを渡殿でつなぎ、更に東西の対屋から渡殿を南に出してその先に釣殿を設けた。

・渡殿 寢殿、対の屋を繋ぐ廊下。厳密に言うところの廊下ではなく、幅が広く居住性を備えたものを指す。廊の部分の中央、

または片側を区切り、片方を通路、片方を部屋として女房の局などに用いた。

三二、薫、女二の宮を女一の宮と比較する

つとめて、起きたまへる女宮の御容貌、「いとをかしげなめるは、これよりかならずまさるべきことかは」と見えながら、「さらに似たまはずこそありけれ。あさましきまであてに、えも言はざりし御さまかな。かたへは思ひなしか、折からか」と思し

て、(薫)「いと暑しや。これより薄き御衣奉れ。女は、例ならぬ物着たるこそ、時々つけてをかしけれ」とて、「あなたに参りて、大式に、薄物の単衣の御衣、縫ひて参れと言へ」とのたまふ。御前なる人は、「この御容貌のいみじき盛りにおはしますを、もてはやしきこえたまふ」とをかしう思へり。

例の、念誦したまふが御方におはしまして、昼つ方渡りたまへれば、のたまひつる御衣、御几帳にうち掛けたり。「なぞ、こは奉らぬ。人多く見る時なむ、透きたる物着るは、ばうぞくにおぼゆる。ただ今はあへはべりなむ」とて、手づから着せ奉りたまふ。御袴も昨日の同じ紅なり。御髪の高さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず。氷召して、人びとに割らせたまふ。取りて一つ奉りなしたまふ、心のうちもをかし。「絵に描きて、恋しき人見る人は、なくやありける。ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、昨日かやうにて、我混じりぬ、心にまかせて見たてまつらしかば」とおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。

(薫)「一品の宮に、御文は奉りたまふや」と聞こえたまへば、(女二宮)「内裏にありし時、主上の、さのたまひしかば聞こえしかど、久しうさもあらず」とのたまふ。(薫)「ただ人にならせたまひにたりとて、かれよりも聞こえさせたまはぬにこそは、心憂かなれ。今、大宮の御前にて、恨みきこえさせたまふ、と啓せむ」とのたまふ。(女二宮)「いか恨みきこえむ。うたてとのたまへば、(薫)「下衆になりたりとて、思し落とすなめり、と見れば、おどろかしきこえぬ、とこそは聞こえぬ」とのたまふ。

翌朝、起きなされた女宮の御器量が、「とても美しくいらつしやるようなのは、この宮よりもきつとまさつていらつしやるだろうか」と思いながらも、「まったく似ていらつしやらない。驚くほど上品で、何とも言えないほどのご様子だなあ。一つには気のせいか、時節柄か」とお思いになつて、

「ひどく暑いね。これより薄いお召し物になさいませ。女性には、変わった物を着ているのが、その時々につけ趣があるものです」と言つて、「あちらに参上して、大式に、薄物の単衣のお召し物を、縫つて差し上げよと申せ」

とおつしやる。御前の女房は、「宮のご器量がたいそう女盛りでいらつしやるのを、さらに引き立てようとなさる」とおもしろく思つていた。

いつものように、念誦をなさるご自分のお部屋にいらつしやつたりなどして、昼頃にお渡りになると、お命じになつていたお召し物が、御几帳に懸けてあつた。

「どうして、これをお召しにならないのか。人が大勢見る時に、透けた物を着るのは、はしたなく思われる。今は構わないでしょう」と言つて、ご自身でお着せなさる。御袴も昨日のと同じ紅色である。御髪の高さや、裾などは負けないが、やはりそれぞれの美しさなのか、似るはずもない。氷を召して、女房たちに割らせなさる。取つて一つ差し上げなどなさる、心の中もおもしろい。

「絵に描いて、恋しい人を見る人は、いないだろうか。ましてこの宮は、気持ちを慰めるのに似つかわしからぬご姉妹であると思うが、昨日あのようにして、自分があの中に混じつていて、心ゆくまで拝することができたなら」と思うと、われ知らずのうちに溜息が漏れてしまった。

「一品の宮に、お手紙は差し上げなさいましたか」
とお尋ね申し上げなされると、

「内裏にいたとき、主上が、そのようにおっしゃったので差し上げましたが、長いことそういたしてません」

とおっしゃる。

「臣下におなりあそばしたといつて、あちらからお便りを下さらないのは、情けないことです。今、大宮の御前に、お恨み申されて
います、と申し上げよう」

とおっしゃる。

「どうしてお恨み申していきましょう。嫌ですわ」

とおっしゃるので、

「身分が低くなったからといって、軽んじていらっしゃるようだ、と思われるので、お便りも差し上げないのです、と申し上げまし

よう」

とおっしゃる。

三三、薫、中宮に参上、匂宮を見る

その日は暮らして、またの朝に大宮に参りたまふ。例の、宮もおはしけり。丁子に深く染めたる薄物の単衣を、こまやかなる直衣に着たまへる、いとこのまじげなる女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは面痩せたまへる、いと見るかひあり。おぼえたまへりと見るにも、まづ恋しきを、いとあるまじきこと、と静むるぞ、ただなりしよりは苦しき。絵をいと多く持たせて参りたまへりける、女房して、あなたに参らせたまひて、渡らせたまひぬ。

その日は過ごして、翌朝に大宮に参上なさる。いつものように、宮もいらつしやつた。丁子色に深く染めたる薄物の単衣を、濃い鰯色の直衣の下に召していらいつしやつたのは、たいそう好感がもてる女宮のお姿が素晴らしかったのにも負けず、白く清らかで、やはり以前よりは面痩せなさっているのは、とても見栄えがする。

似ていらつしやると見るにつけても、まづさきに恋しいのを、まことにけしからぬこと、と抑えるのは、拝見しなかった時よりもつらい。絵をととてもたくさん持たせて参上なさつたが、女房を介して、あちらに差し上げなさつて、ご自分もお渡りになった。

三四、薫、女一の宮に近づこうとする

大將も近く参り寄りたまひて、御八講の尊くはべりしこと、いにしへの御こと、すこし聞こえつつ、残りたる絵見たまふついでに、(薫)「この里にものしたまふ皇女の、雲の上離れて、思ひ屈したまへるこそ、いとほしう見たまふれ。姫宮の御方より、御消息もはべらぬを、かく品定まりたまへるに、思し捨てさせたまへるやうに思ひて、心ゆかぬけしきのみはべるを、かやうのもの、時々ものせさせたまはなむ。なにがしがおろして持てまからむ。はた、見るかひもはべらじかし」とのたまへば、「あやしく。などてか捨てきこえたまはむ。内裏にては、近かりしにつきて、時々も聞こえたまふめりしを、所々になりたまひし折に、とだえたまへるにこそあらめ。今、そそのかしきこえむ。それよりもなどかは」と聞こえたまふ。「かれよりは、いかでかは。もとより数まへさせたまはざらむをも、かく親しくてさぶらふべきゆかりに寄せて、思し召し数まへさせたまはむをこそ、うれしくははべるべけれ。まして、さも聞こえ馴れたまひにけむを、今捨てさせたまはむは、からきことにはべり」と啓せさせたまふを、「好きばみたるけしきあるか」とは思しかけざりけり。

立ち出でて、「一夜の心ざしの人に会はむ。ありし渡殿も慰めに見むかし」と思して、御前を歩み渡りて、西ぎまにおはするを、御簾の内の人は心ことに用意す。げに、いと様よく限りなきもてなして、渡殿の方は、左の大殿の君たちなど居て、物言ふけはひすれば、妻戸の前に居たまひて、「おほかたには参りながら、この御方の見参に入ることの、難くはべれば、いとおぼえなく、翁び果てにたる心地しはべるを、今よりは、と思ひ起こしはべりてなむ。ありつかず、若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君たちの方を見やりたまふ。「今よりならはせたまふこそ、げに若くならせたまふならめ」など、はかなきことを言ふひとのけはひも、あやしうみやびかに、をかしき御方のありさまにぞある。そのこととなけれど、世の中の物語などしつ、しめやかに、例よりは居たまへり。

大将も近くに参り寄りなざつて、御八講が立派であつたことや、昔の御事(亡き光源氏や紫の上との思い出)を少し申し上げながら、残っている絵を(中宮が)御覧になる折に、

「わたしの里にいらつしやる皇女が、宮中から離れて、思い沈んでいらつしやるのが、お気の毒に拝されます。姫宮の御方から、お便りもございませんのを、このように身分が決定なされたので、お見捨てあそばされたように思つて、気の晴れない様子ばかりしてありますが、こうした物を、時々お見せ下さいませ。わたしが直接持つて参りますのも、また、張り合いのないものです」

と申し上げなさると、

「変なこと。どうしてお見捨て申し上げなさいましょう。内裏では、近かつたことにつけて、時々手紙のやりとりをなさつたようですが、別々におなりになった時から、滞りがちになったのでしょうか。これから、お促し申し上げます。そちらからもうどうして差し上げなさらないのですか」

と申し上げなさる。

「あちらからは、どうしてできましようか。もともとお心に懸けていただけなかったとしても、こうして親しく伺候します縁にことよせて、お心を懸けてくださいましたら、嬉しいことでございます。それ以上に、そのように親しくなさつていたのを、今お見捨てになるのは、つらいことでございます」

と申し上げなさるのを、「好色心があるのか」とは思いよりなさらなかった。

お立ちになって、「先夜のお目当ての女に会おう。先日渡殿も慰めに見よう」とお思いになって、御前を渡つて、西の方角にいらつしやるのを、御簾の内側の女房は特に緊張する。なるほど、たいそう風采よく、この上ない身のこなして、渡殿の方では、左の大殿の公達などが座つていて、何か言っている様子がするので、妻戸の前にお座りになって、

「よく参上はいたしますが、こちらの御方にはお目にかかることも、めつたにございませんので、いつのまにか、老人めいた気持ちでございますが、今からは、と気を奮い起こしまして。不似合いな振る舞いだと、若い人たちは思うでしょう」

と、甥の公達の方を御覧になる。

「今からお馴染みになられたら、なるほど若返りなされるでしょう」

などと、とりとめもないことを言う女房たちの様子も、不思議と優雅で、風情のあるこちらの御方のご様子である。特に用事ということはないが、世間話などをしながら、しんみりと、いつもよりは長居なされた。

三五、中宮方で宇治のうわさ

姫宮は、あなたに渡らせたまひにけり。大宮、「大将のそなたに参りつるは」と問ひたまふ。御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に、もののたまはむとにこそは、はべめりつれ」と聞こゆるに、「例、まめ人の、さすがに人に心とどめて物語するこそ、心地おくれたらむ人は苦しけれ。心のほども見ゆらむかし。小宰相などは、いとうしろやすし」とのたまひて、御姉弟なれど、この君をば、なほ恥づかしく、「人も用意なくて見えざらむかし」と思いたり。「人よりは心寄せたまひて、局などに立ち寄りたまふべし。物語こまやかにしたまひて、夜更けて出でたまふ折々もはべれど、例の目馴れたる筋にははべらぬにや。宮をこそ、いと情けなくおはしますと思ひて、御いらへをだに聞こえずはべるめれ。かたじけなきこと」と言ひて笑へば、宮も笑はせたまひて、「いと見苦しき御さまを、思ひ知るこそをかしけれ。いかで、かかる御癖やめたてまつらむ。恥づかしや、この人びとも」とのたまふ。

(大納言の君)「いとあやしきことをこそ聞きはべりしか。この大将の亡くなしたまひてし人は、宮の御二条の北の方の御おとうとなりけり。異腹なるべし。常陸の前の守なにがしが妻は、叔母とも母とも言ひはべるなるは、いかなるにか。その女君に、宮こそ、いと忍びておはししけれ。大将殿や聞きつけたまひたりけむ。にはかに迎へたまはむとて、守り目添へなど、ことごとしくしたまひけるほどに、宮も、いと忍びておはししながら、え入らせたまはず、あやしきさまに、御馬ながら立たせたまひつつぞ、帰らせたまひける。女も、宮を思ひきこえさせけるにや、にはかに消え失せにけるを、身投げたるなめりとしてこそ、乳母などやうの人どもは、泣き惑ひはべりけれ」と聞こゆ。宮も、「いとあさまし」と思ひて、「誰れか、さることは言ふとよ。いとほしく心憂きことかな。さばかりめづらかならむことは、おのづから聞こえありぬべきを。大将もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじきこと、かく宇治の宮の族の、命短かりけることをこそ、いみじう悲しと思ひてのたまひしか」とのたまふ。「いさや、下衆は、たしかならぬことをも言ひはべるものを、と思ひはべれど、かしこにはべりける下童の、ただこのころ、宰相が里に出でまうできて、たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ。かくあやしうて亡せたまへること、人に聞かせじ。おどろおどろしく、おぞきやうなりとて、いみじく隠しけることどもとて。さて、詳しくは聞かせたてまつらぬにやありけむ」と聞こゆれば、「さらに、かかること、またまねぶな、と言はせよ。かかる筋に、御身をもてそこなひ、人に軽く心づきなきものに思はれぬべきなめり」といみじう思いたり。

姫宮は、あちらにお渡りあそばした。大宮が、

「大将がそちらに参つたが」

とお尋ねになる。お供して参つた大納言の君が、

「小宰相の君に、何かおっしゃろうとのことで、ございましょう」

と申し上げると、

「いつもの、真面目人間が、やはり女性に心を止めて話をするのは、気のきかない人でしたら困ります。心の底も見透かされるでし

よう。小宰相などは、とても安心です」

とおっしゃって、ご姉弟であるが、この君を、やはり恥づかしく思い、「女房たちも不注意に應對しないでほしい」とお思いになつていた。

「どの女房よりも心をお寄せになって、局などにお立ち寄りなさるのでしょうか。お話を親密になさって、夜が更けてお帰りになる時々もございましたが、普通のありふれた色恋沙汰ではないのでしょうか。宮を、とても情けないお方と思つて、お返事さえ差し上げないようでございます。恐れ多いこと」

と言つて笑うと、宮もにつこりあそばして、

「ひどく見苦しいご様子を、知つてるのがおもしろい。何とかして、あのようなお癖を止めさせ申したいものです。恥ずかしいね、そなたたちの手前も」

とおつしやる。

「とても不思議な事を聞きました。この大將殿が亡くしなされた人は、宮の二条の北の方のお妹君でした。異腹なのでしよう。常陸の前の介の何某の妻は、叔母とも母とも言つていますのは、どういふものでしょうか。その女君に、宮が、まことにこつそりとお通いになりました。

大將殿がお聞きつけになつたのでしょうか。急遽お迎えなさろうとして、番人を増やしなどして、嚴重になさつているところに、宮も、とてもこつそりとお通いになりながら、お入りになることができず、粗末な姿で、お馬に乗つて立つたまま、お帰りになりました。

女も、宮をお慕い申し上げていたのでしょうか、急に消えてしまいました。身投げしたようだと言つて、乳母などの女房は、泣き暮れておりました」

と申し上げる。大宮も、「まことに呆れたことだ」とお思ひになつて、

「誰が、そのようなことを言うのですか。お気の毒な情けないことですね。それほど珍しい事は、自然と噂にならうものを。大將もそのようには言わないで、世の中のはかなく無常なこと、このような宇治の宮の一族の短命であつたことを、ひどく悲しんでおつしやつていたが」

とおつしやる。

「さあ、下衆は、確かでないことも申すものを、と思ひますが、あちらに仕えておりました下童が、つい最近、小宰相の君の実家に
出て参つて、確かなことのように言いました。このように不思議に亡くなつたことは、誰にも聞かせまい。大げさで、気味の悪い話だからといつて、ひどく隠していたこととか。そうして、詳しくはお聞かせ申し上げなかつたのでしょうか」

と申し上げると、

「まったく、このような話は、二度と他人には話さないように、と言わせなさい。このような色恋沙汰で、お身の上を過ち、世人に軽々しく響きをおかひになることになりましょう」

とたいそうご心配になつた。

三六、薫の反省

その後、姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり。御手などの、いみじううつくしげなるを見るにも、いとうれしく、「かくてこそ、とく見るべかりけれ」と思ふ。

あまたをかしき絵ども多く、大宮もたてまつらせたまへり。大將殿、うちまさりてをかしきども集めて、参らせたまふ。芹川の大將の遠君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて行きたる画、をかしう描きたるを、いとよく思ひ寄せ

らるか。」「かばかり思し靡く人のあらましかば」と思ふ身ぞ口惜しき。

(薫)「荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみける」

と書きても添へまほしく思せど、「さやうなるつゆばかりのけしきにても漏りたらば、いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ。

かくよろづに何やかやと、ものを思ひの果ては、昔の人のものしたまはましかば、いかにもいかにも他ぎまに心分けましや。時の帝の御女を賜ふとも、得たてまつらざらまし。また、さ思ふ人ありと聞こし召しながらは、かかることもなからましを、なほ心憂く、わが心乱りたまひける橘姫かな」と思ひあまりては、また宮の上にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をこがましきまで悔しき。

これに思ひわびて、さしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さすがにしみじとものを、思ひ入りけむほど、わがけしき例ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけむありさまを、聞きたまひしも思ひ出でられつつ、「重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむ、と思ひしには、いらうたかりし人を。思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ。女をも憂しと思はじ。ただわがありさまの世づかぬおこたりぞ」など、眺め入りたまふ時々多かり。

その後、姫宮の御方から、二の宮にお便りがあつたのだつた。ご筆跡などが、たいそううつくしげなのを見るにつけ、実に嬉しく、「こうしてこそ、もっと早く見るべきであつた」とお思いになる。

たくさんさんの趣のある絵をたくさん、大宮も差し上げあそばした。薫大將殿は、(お借りした絵よりも)それ以上に趣のある絵を集めて、(女一の宮に)差し上げなさる。(絵の中の一つに)芹川の大將が遠君(元服前)の、女一の宮に恋をしている秋の夕暮に、思いあまつて出かけて行つた絵が、趣深く描けているのを、とてもよく(女一の宮に恋をしている)わが身に思い当たるのである。「あれほどまで思い靡いてくださる方があつたら」と思う(女一の宮に片思いしている)わが身が残念である。

「荻の葉に露が結んでいる上を吹く秋風も夕方には特に身にしみて感じられる」

と書き添えたと思うが、

「そのようなのを少しの様子にでも漏らしたら、とてもやかいそうな世の中であるから、ちよつとしたことも、ちらつと出すことができない。このようにいろいろと何やかやと、憂愁を重ねた果てに思うことは、亡き宇治の大君が生きていらつしやつたら、(私は)どうして他の女に心を傾けたりしようか。今上の帝の内親王を賜うといつても、(私は)頂戴はしなかつたらうに。また、(私には)そのように思う女(宇治の大君)がいるとお耳にあそばしながら、このような(女二宮をお嫁せになる)ことはなかつたらうが、やはり情けなく、わたしの心を乱しなかつた宇治の橘姫だなあ」と思い余つて、また中君に執着して、恋しく切なく、どうにもしようがないのを、馬鹿らしく思うまで悔しい。

この方に思い悩んで、その次には、嘆かわしい有様で亡くなつた人(浮舟)が、とても思慮浅く、思いとどまるところのなかつた軽率さを思いながら、やはり大変なことになつたと、(浮舟が)思いつめていたほどを、わたしの態度(薫が浮舟の匂宮と通じていることを気づき、警戒し出した態度)がいつもと違つていると、良心の呵責に苛まれて嘆き沈んでいた様子を、(右近から薫が)お聞きになつたことも思い出されて、「思慮の深い重々しい方としての扱いでなく、ただ心安くかわいらしい話し相手としておこう、と思つた

わりには、実にかわいらしい人であつたなあ。思い続けると、匂宮をお恨み申すまい（※女一宮を恋いすまい）。女（浮舟）をもひどいと思うまい。ただわが人生が世間ずれしていない失敗なのだ（私の配慮が足らなかったせいだ）」などと、物思いに耽りなさる時々が多かった。

女性のたしなみ

『枕草子』のエピソード

村上天皇期に、宣耀殿女御と呼ばれた藤原芳子に対し、父親である小一条大将（藤原師尹）は、「琴、筆跡（かな書道）、『古今集』の暗記（和歌）の3つをやりなさい」と教えた。村上天皇はこの話を聞き、本当に暗記しているのか、物忌みの日に試験した。ところが、芳子はすべて間違えることなく暗記していたという。

筆跡で人柄を思い描く事はあるらしい。

『源氏物語』において（紫式部の考え方）

梅枝巻（第三十二巻）において、書道論と聞香論との議論が戦わされている。この巻では、源氏が理想のお妃教育を施した明石の君が皇太子妃に嫁ぐとき、持っていくものとして様々な人に香を調査させ、様々な人の字の手本を集めさせているが、それを源氏が批評している。

教育としての物語

物語の役割↓①暇つぶし②少女少女教育

実社会とのかかわりをもつ土台として、物語が用いられていた。

子供を教育するときには物語を品定めして選び、子供に与えた。

薫の片思い

芹川の物語のように現実が進行していたらなあ…それにくらべて、片思いの身である私は…

「萩の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみける」

…秋は、一年の中で人恋しい季節。特に夕暮れ時はなおさら…

「萩」や「秋風」はしばしば和歌に詠まれる題材↓『歌枕・歌言葉辞典』で調べてみてください。

皇女独身主義

天皇の娘は、皇族の中に相手がいなければ一生独身でいるべき。それほど皇族の血筋は高貴なものであった。

↓平安時代になると、摂関家や源氏などと結婚するケースもでてきた。

女一の宮は天皇からも皇后からも寵愛を受け、この世でいちばん幸せに生まれたといえる。

「妃」になること

「妃」になること＝天皇の母になることが、この時代の女性の最高の理想であった。

菅原孝標女は、源氏物語を手に入れた喜びを「後の位も何にかはせむ」と更級日記の中で表現している。

橋姫

宇治十帖の第一巻Ⅱ「橋姫巻」

橋姫：橋を守る女神。特に宇治橋のたもとの橋姫神社に祀られている「宇治の橋姫」を指す。

昔の物流においては水運が重要であった（木材の運搬など）ため、川は重要であった。（そのため、山奥であっても川のほとりであれば栄えているところ（備中高梁など）があった。）

そのため、橋を造っても建造や維持にコストがかかるだけでなく、むしろ水運の邪魔であったため、橋はめったに作られなかった。川の横断には、直接わたったり、渡し船を利用したり、ごく稀に浮き橋（船をロープで結びその上に板を渡す）を設置したりして、横断していた。

古今集におさめられている宇治橋に関する歌

古今集には宇治橋にちなむ歌が3つおさめられており、ここからその背後に橋姫伝説が想像されなくもない

・恋四・六八九 さむしるに 衣片敷き 今宵もや 我を待つらむ 宇治の橋姫

（狭いむしるに自分の衣だけを敷いて独り寝をして、今宵も私を待っているのだろうか。宇治の橋姫は）

共寝をする時には二人の衣を重ねて敷くので、片方だけ敷いている「衣かたしき」というのは独り寝ということ

・恋五・八二五 忘らるる 身を宇治橋の 中絶えて 人も通はぬ 年ぞ経にける

（あの人が通ってこないまま年が変わってしまった。きっと私はあの人に忘れられたのだろう。本当に悲しいことだ。）

宇治と憂しが掛詞。橋・絶ゆ・通う、は縁語（橋に関連）

（忘れられている私が、「憂し」という宇治橋が途中で切れて誰も渡らない年月が経っているように、

あの人が通って来ない年月が経ってしまいました）

・雑上・九〇四 ちはやぶる 宇治の橋守 なれをしぞあはれとは思ふ 年の経ぬれば

前の二つと関連づけて橋守を橋姫と読み替えると…ずっと待ち続けてくれたあなたの事を哀れに思うよ、というニュアンス

・薫は宇治の大君のことを橋姫とよんでいる。

匂宮は中君に「中絶えむ ものならなくに 橋姫の 片敷く袖や 夜半に濡らさん」という歌を贈っている

古今集の歌をふまえた上で、橋姫の巻もつくられ、匂宮と中君の恋も語られ…宇治十帖が構成されていることがわかる

橋姫物語

室町時代の御伽草子に『橋姫物語』があり、それと院政期（十二世紀）の昔物語に『橋姫物語』があるが…橋姫物語が源氏物語より古く成立したという証拠は無い…

二人妻

男には本の妻がいたが、本の妻には財力が無く婿かしづきできない。そのため、新しく今の妻を設ける。結局、本の妻の心優しさやたしなみに気づき、今の妻のだらしなさをいやに思い、本の妻の所に帰ってくる…というのが「二人妻」という話。だが、これで話は終わらない。

本の妻が懐妊し、わかめが食べたい、と言うので、男は海にわかめを探しにいくが、そのまま音信不通になってしまう。本の

妻が出産して後、男を捜しにいったが、実は、男が海辺で笛を吹いていたところ、竜王が男を見初めて、男は竜王の娘の婿にされていた。だが、夜に男は竜王の世界の食事は口にせず、夜になると竜宮城から浜辺に来て、浜辺に住む老女の小屋に食事をしに来ていた。本の妻が海辺の小屋で老女に消息を聞くと、老女は「あなたの探している男は竜王の婿になったが、毎晩ここに食事に來ます。物陰に隠れて声を出さずに見ていてください。この中には竜王のガードマンも入りませんから、この小屋の中で話してください」と言った。本の妻は今の妻にこの話をして、今の妻も物陰に隠れてその様子をみていた。すると、男は「さむしろに 衣片敷き 今宵もや 我を待つらむ 宇治の橋姫」と口ずさみながらやってきたので、「私より本の妻のほうが好きだったね」と感じた今の妻は、悔しがって男に襲いかかってしまった。そのとたんに、小屋や男は消え失せてしまい、そこには貝しか残っていなかった。本の妻は悲しんで、後を追うように身投げした。

・この話が源氏物語より先にあったかどうかはわからない

・ただ、照らし合わせてみると薫と逆の展開（薫の方が一人取り残されている）…考えない方がいいかもしれない（笑）

・しかるべき伝説（橋姫の伝説）は想像される…

「宮をも思ひきこえじ」

「勾宮を恨みますまい」と解釈する説と、「女一の宮様のことを恋すまい」と解釈する説がある。

三七、勾宮、侍従を中宮に出仕さす

心のどかに、さまよくおはする人だに、かかる筋には、身も苦しきことおのづから混じるを、宮は、まして慰めかねつつ、かの形見に、飽かぬ悲しさをものたまひ出づべき人さへなきを、対の御方ばかりこそは、「あはれ」などのたまへど、深くも見馴れたまはざりける、うちつけの睦びなれば、いと深くしも、いかでかはあらむ。また、思すままに、「恋しや、いみじや」などのたまはむには、かたはらいなければ、かしこにありし侍従をぞ、例の、迎へさせたまひける。

皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人なむ、取り分きて思したりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど、なほ語らひてあり経るに、世づかぬ川の音も、うれしき瀬もやある、と頼みしほどこそ慰めけれ、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて、京になむ、あやしき所に、このころ来てゐたりける、尋ねたまひて、

「かくてさぶらへ」

とのたまへば、「御心はさるものにて、人びとの言はむことも、さる筋のこと混じりぬるあたりは、聞きにくきこともあらむ」と思へば、うけひききこえず。「後の宮に参らむ」となむおもむけたれば、

「いとよかなり。さて人知れず思し使はむ」

とのたまはせけり。心細くよるべなきも慰むやとて、知るたより求め参りぬ。「きたなげなくてよろしき下臈なり」と許して、人もそしらず。大将殿も常に参りたまふを、見るたびごとに、もののみあはれなり。「いとやむごとなきものの姫君のみ、参り集ひたる宮」と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、「見たてまつりし人に似たるはなかりけり」と思ひありく。

悠長で、自制心が強くいらつしやる人でさえ、このような方面には、身も苦しいことが自然と出て来るのを、宮は、彼以上に慰めかねながら、あの形見として、尽きない悲しみをおつしやる相手さえいないが、対の御方だけは、「かわいそうに」などとおつしやるが、

深く親しんでいらつしやらなかった、短い交際であつたので、とても深くはどうしてお思いになろうか。また、お気持ちのままに、「悲しい、悲しい」などとおつしやるのは、気がひけるので、あちらにいた侍従を、例によって、迎えさせなかつた。

皆女房たちは散り散りになって、乳母とこの人ら二人は、特別に目をかけてくださったのも忘れることができず、侍従は身内外の女房であるが、やはり話相手として暮らしていたが、どこにもないような川の音も、何か嬉しいこともあるのか、と期待していたうちは慰められたが、気持ち悪く大変に恐ろしくばかり思われて、京で、みすばらしい所に、最近来ていたのを、捜し出しながつて、

「こうして仕えていなさい」

とおつしやるが、「お心はお心としてありがたいが、女房たちが噂するのも、そのような方面のことが絡んでいるところでは、聞きにくいこともある」と思うと、お引き受け申さない。「後の宮にお仕えしたい」と希望したので、

「とても結構なことだ。それでは内々に目をかけてやろう」

とおつしやるのだった。心細く頼りとするところのないのも慰むことがあろうかと、縁故を求めて出仕した。「小ざつぱりとしたまああの下臈だ」と認めて、誰も非難しない。大將殿もいつも参上なさるのを、見るたびごとに、何となくしみじみとする。「とても

高貴な大家の姫君ばかりが、大勢いらつしやる宮邸だ」と女房が言うのを、だんだん目をとめて見るが、「やはりお仕えしていた方に似た美しい姫君はいないものだ」と思っている。

古今六帖

P128の2行目注5について…

『弄花抄』は「祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川うれしき瀬にも流れあふやと」（古今六帖三、川）を指摘。

古今六帖 古今和歌六帖の略称。源氏物語成立以前の平安中期（九八〇年頃）に成立したの類題歌集（部類歌集）。六卷。編者・成立年ともに未詳。万葉集・古今集・後撰集などの歌約四千五百首を、歳時・天象・地儀など二十五項、五百十六題に分類、さらに六帖としたもの。古今六帖。

「祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川うれしき瀬にも流れあふやと」は、「地儀」の部の「川」に分類されている。

三八、式部卿の宮の姫、女一の宮の侍女となる

この春亡せたまひぬる式部卿宮の御女を、継母の北の方、ことにあひ思はで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき、心懸けたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになむ契る、と聞こし召すたよりありて、「いとほしう。父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさむこと」などのたまはせければ、いと心細くのみ思ひ嘆きたまふありさまにて、「なつかしう、かく尋ねのたまはするを」など、御兄の侍従も言ひて、このころ迎へ取らせたまひてけり。姫宮の御具にて、いとこよなからぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひきかけたまふぞ、いとあはれなりける。

兵部卿の宮、「この君ばかりや、恋しき人に思ひよそへつべききましたらむ。父親王は兄弟ぞかし」など、例の御心は、人を恋ひたまふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけたまひてけり。大將、「もどかしきまでもあるわがかな。昨日今日といふばかり、春宮にやなど思し、我にもけしきばませたまひきかし。かくはかなき世の衰へを見るには、水の底に身

を沈めても、もどかしからぬわざにこそ」など思ひつつ、人よりは心寄せきこえたまへり。

今年の春お亡くなりになった式部卿宮の御娘を、継母の北の方が、特にかわいがらないで、その兄の右馬頭で人柄も格別なところもないのが、心を寄せているのを、不憫だとも思わずに縁づけている、とお耳にあそばしたことがあって、

「お気の毒に。父宮がたいそう大切になさっていた女君を、つまらないものにしてしまおうとは」

などと仰せになったので、ひどく心細くばかり思い嘆いていらつしやる有様で、

「やさしく、このようにおつしやつてくださるものを」

などと、ご兄妹の侍従も言つて、最近迎え取らせなされた。姫宮のお相手として、まことに最適のご身分の方なので、高い身分の方として特別の扱いで伺候なさる。決まりがあるので、宮の君などと呼ばれて、裳ぐらいはお付けになるのが、ひどくおいたわしいことであつた。

兵部卿宮は、「この宮ぐらいは、恋しい人に思いよそえられる様子をしていようか。父親王は兄弟であつた」などと、例のお心は、故人を恋慕いなさるにつけても、女を見たがる癖がやまず、早く見たいとお心に掛けていらした。

大將は、「非難がましいことを言いたくなることだ。昨日今日という間に、春宮に差し上げようかななどとお思いになり、わたしにもそのようなご様子をほめかされたのだ。このように無常な世の中の衰退を見ると、川の底に身を沈めても、非難されないことだ」などと思ひながら、誰よりも同情をお寄せ申し上げなされた。

氏長者

古代日本では氏上（うじがみ）と呼ばれており、その氏（うじ）の中の代表者の事を差す。律令制度が導入されてからは、一般的にその氏族の中でもっとも官位が高いものがその地位についた。平安時代頃から氏長者と呼ばれる様になる。

氏長者は一族の責任をとる役割をもち、身寄りの無い者は氏長者によつて救済された。

女性の装束

桂（うちき）…表着と単の間に何枚も重ね着した衣の総称

表着（うわぎ）…女房装束で、唐衣の下、重ねの桂の一番上に着た綾の袷。名前の由来は、重ねの桂で一番上に着たことから。よく目立つため、行事の時には絢爛たる錦を使った。

裳（も）…女房の正装で、表着の上で腰に巻くもの。身分の高い人の前では必ず着用しなければならなかった。正装において唐衣は省略できても、裳は省略不可。

唐衣（からぎぬ）…女房装束の一番上に着る表着

三九、六条の院の中宮の生活

この院におはしますをば、内裏よりも広くおもしろく住みよきものにして、常にしもさぶらはぬどもも、皆うちとけ住みつつ、はるばると多かる対ども、廊、渡殿に満ちたり。右大臣殿、昔の御けはひにも劣らず、すべて限りもなく営み仕うまつりたまふ。いかめしうなりたる御族なれば、なかなかいにしへよりも、今めかしきことはまさりてさへなむありける。

この宮、例の御心ならば、月ごろのほどに、いかなる好きごとどもをし出でたまはまし、こよなく静まりたまひて、人目に「す

こし生ひ直りたまふかな」と見ゆるを、このころぞまた、宮の君に、本性現はれて、かかづらひありきたまひける。

この院にいらっしやるのを、内裏よりも広く興趣あつて住みよい所として、いつもは伺候していない女房どもも、みな氣を許して住みながら、広々とたくさんある対の屋や、渡廊や、渡殿などにいっぱいいる。

左大臣殿は、昔のご様子にも負けず、すべてこの上もなくお世話申し上げていらっしやる。盛んになったご一族なので、かえつて昔以上に、華やかな点ではまさるのであった。

匂宮は、いつものお心ならば、幾月かの間に、どのような好色でもなさつていたところが、すっかり落ち着きなさつて、傍目には「少しは大人びてお直りになったなあ」と見えるが、最近再び、宮の君に、ご本性を現して、まつわりつきなさるのであった。

女房の分類

定番の女房（じようばん）：四六時中お仕えしている女房

番（ばん）：一ヶ月交代くらいの当番制でお仕えしている女房

客人（まらうど）

薫と匂宮の対照的な性格

薫：幼いときに聞いた自分の出生の噂がトラウマとなり、社会的地位も約束されているにもかかわらず出世には関心がなく、

人の世は儂いものと捉えて、現世に執着の残る恋愛などは避けている

匂宮：「少しなよび和（やはら）ぎ過ぎて、好きたる方に引かれ」とあるように少々浮気者で積極的な性格

四〇、秋、侍従、薫と匂宮を見る

涼しくなりぬとて、宮、内裏に参らせたまひなむとすれば、

「秋の盛り、紅葉のころを見ざらむこそ」

など、若き人びとは口惜しがりて、皆参り集ひたるころなり。水に馴れ月をめでて、御遊び絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞ、かかる筋はいとこよなくもてはやしたまふ。朝夕目馴れても、なほ今見む初花のさましたまへるに、大将の君は、いとさしも入り立ちなどしたまはぬほどにて、恥づかしう心ゆるびなきものに、皆思ひたり。

例の、二所参りたまひて、御前におはするほどに、かの侍従は、ものより覗きたてまつるに、

「いづ方にもいづ方にもよりて、めでたき御宿世見えたるさまにて、世にぞおはせましかし。あさましくはがなく、心憂かりける御心かな」

など、人には、そのわたりのこと、かけて知り顔にも言はぬことなれば、心一つに飽かず胸いたく思ふ。宮は、内裏の御物語など、こまやかに聞こえさせたまへば、いま一所は立ち出でたまふ。「見つけられたてまつらじ。しばし、御果てをも過ぐさず心浅し、と見えたてまつらじ」と思へば、隠れぬ。

涼しくなったといつて、后宮は、内裏に帰参なさろうとするので、

「秋の盛りは、紅葉の季節を見ないというのは」

などと、若い女房たちは残念がつて、みな参集している時である。池水に親しみ月を賞美して、管弦の遊びがひっきりなしに催され、

いつもより華やかなので、この宮は、このような方面では実にこの上なく賞賛されなざる。朝夕に見慣れていても、やはり今初めて見た初花のようなお姿でいらつしやるが、大将の君は、あまりそれほど入り込んだりなさらないので、こちらが恥ずかしくなるような気のおける方だと、みな思っていた。

いつもの、お二方が参上なさって、御前にいらつしやる間に、あの侍従は、物蔭から覗いて拝すると、

「どちらの方なりとも縁付いて、幸運な運勢に思えたご様子で、この世に生きておいでだったらなあ。あされるほどあつけなく情けなかつたお心であつたよ」

などと、他人には、あの辺のことは少しも知っている顔をして言わないことなので、自分一人で尽きせず胸を痛めている。宮は、内裏のお話など、こまごまとお話申し上げあそばすので、もうお一方はお立ちになる。「見つけれ申すまい。もう暫くの間は、二週間も待たないで薄情な人だ、と思われ申すまい」と思うつて、隠れた。

旧暦の四季

気 候 学	天 文 学	旧 暦・節区切り	旧 暦・月区切り
春	新暦三〜五月	春分〜夏至前日	立春〜立夏前日
夏	新暦六〜八月	夏至〜秋分前日	立夏〜立秋前日
秋	新暦九〜十一月	秋分〜冬至前日	立秋〜立冬前日
冬	新暦十二〜二月	冬至〜春分前日	立冬〜立春前日
			旧暦十〜十二月

四一、薫、東の渡殿に女房と語る

東の渡殿に、開きあひたる戸口に、人びとあまたゐて、物語などする所におはして、

「なにがしをぞ、女房は睦まじと思すべき。女だにかく心やすくはよもあらじかし。さすがにさるべからむこと、教へきこえぬべくもあり。やうやう見知りたまふべかめれば、いとなむうれしき」

とのたまへば、いといらへにくくのみ思ふ中に、弁の御許とて、馴れたる大人、

「そも睦まじく思ひきこゆべきゆゑなき人の、恥ぢきこえはべらぬにや。ものはさこそはなかなかはべるめれ。かならずそのゆゑ尋ねて、うちとけ御覧ぜらるるにしもはべらねど、かばかり面無くつくりそめてける身に負はざらむも、かたはらいたくてなむ」

と聞こゆれば、

「恥づべきゆゑあらじ、と思ひ定めたまひてけるこそ、口惜しけれ」

など、のたまひつつ見れば、唐衣は脱ぎすべし押しやり、うちとけて手習しけるなるべし、硯の蓋に据ゑて、心もとなき花の末手折りて、弄びけり、と見ゆ。かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、押し開けたる戸の方に、紛らはしつつゐたる、頭つきどもも、をかしと見わたしたまひて、覗ひき寄せて、

「女郎花乱るる野辺に混じるとも

露のあだ名を我にかけめや

心やすくは思さで」

と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろきなどもせず、のどやかに、いととく、

「花といへば名こそあだなれ女郎花

なべての露に乱れやはする」

と書きたる手、ただかたそばなれど、よしづきて、おほかためやすければ、誰ならむ、と見たまふ。今参う上りける道に、塞げられてとどこほりゐたるなるべし、と見ゆ。弁の御許は、

「いとけやかなる翁言、憎くはべり」とて、

「旅寝してなほころみよ女郎花

盛りの色に移り移らず

さて後、定めきこえさせむ」

と言へば、

「宿貸さば一夜は寝なむおほかたの

花に移らぬ心なりとも」

とあれば、

「何か、恥づかしめさせたまふ。おほかたの野辺のさかしらをこそ聞こえさすれ」

と言ふ。はかなきことをただすこしのたまふも、人は残り聞かまほしくのみ思ひきこえたり。

「心なし。道開けはべりなむよ。分けても、かの御もの恥ぢのゆゑ、かならずありぬべき折にぞあめる」

とて、立ち出でたまへば、「おしなべてかく残りなからむ、と思ひやりたまふこそ心憂けれ」と思へる人もあり。

東の渡殿に、開いている戸口に、女房たちが大勢いて、話などをひっそりとしている所にいらして、

「わたしをこそ、女房は親しみやすくお思いになるべきではありませんか。女でさえこのように気のおけない人はいません。それでまためになることを、教えて上げられることもあります。だんだんとお分かりになりそうですから、とても嬉しいです」

とおっしゃるので、とても答えにくくばかり思っている中で、弁のおもといつて、物馴れている年配の女房が、

「そのようにも親しくすべき理由のない者こそ、気兼ねなく振る舞えるのではないのでしょうか。物事はかえってそのようなものです。

必ずしもその理由を知ったうえで、くつろいでお話申し上げるというのもございませんが、あれほど厚かましが身についているわたしが引き受けないのも、見ていられませんで」

と申し上げると、

「恥じる理由はあるまい、とお決めになっていらっしゃるのが、残念なことです」

などと、おっしゃりながら見ると、唐衣は脱いで押しやって、くつろいで手習いをしていたのであろう、硯の蓋の上に置いて、頼りなさそうな花の枝先を手折って、弄んでいた、と見える。ある者は几帳のある所にすべり隠れ、またある者は背を向けて、押し開けてある妻戸の方に、隠れながら座っている、その頭の恰好を、興味あると一回り御覧になって、硯を引き寄せて、

「女郎花が咲き乱れている野辺に入り込んで」

露に濡れたという噂をわたしにお立てになれましょうか

どなたも気を許してくださいらないので」

と、ちょうどこの襖障子の後向きしていた女房にお見せになると、身動きもせずに、落ち着いて、すぐさま、

「花と申せば名前からして色っぽく聞こえますが

女郎花はそこらの露に靡いたり濡れたりしません」

と書いた筆跡は、ほんの一首ながら、風情があつて、だいたいに無難なので、誰なのだろう、とお思いになる。今参上した途中で、道をふさがれてとどまっていた者らしい、と思う。弁のおもとは、

「まことにはつきりした老人めいたお言葉、憎うございます」と言って、

「旅寝してひとつ試みて御覧なさい

女郎花の盛りの色にお心が移るか移らないか

そうして後に、お決め申し上げましょう」

と言うので、

「お宿をお貸しくださるなら、一夜は泊まってみましょう

そこらの花には心移さないわたしですが」

とあるので、

「どうして、恥をおかせなさいます。普通にいう野辺のしやれを申し上げただけです」

と言う。とりとめのないことをほんのちよつとおつしやつても、女房はその続きを聞きたくばかりお思い申し上げていた。

「うっかりしていました。道を開けますよ。特に意識して、あちらで恥ずかしがつていらやる理由が、きつとありそうな折ですから」

と言って、お立ちになると、「だいたいこのような奥ゆかしいところがないだろう、とご想像なさるものがつらい」と思っている女房もいた。

宋玉「登徒子好色賦」

南北朝時代の詩集である「文選」（本当は三十巻だが、李善の注を含めて六十巻）の中に、巻十九のなかに「登徒子好色賦」がおさめられている。

宋玉と登徒子とともに楚国の大夫であり、楚の王とは親しい関係にある。登徒子は宋玉の才能を妬み、「宋玉は好色な人間ですから、お近づけにならないように」と讒言した。

それに対して宋玉は反論した。「わたしはちつとも好色ではありません。わたしの故郷は美人の産地であり、そのなかでも一番の美人はわたしの東隣に住んでおります。彼女は三年の間、壁の隙間を通してわたしを覗きましたが、わたしの心は動きませんでした。だから、わたしは好色な人物ではありません。それに比べ、登徒子は醜い風貌であり、なおかつ五、六人の子供を作っています。登徒子のほうが遥かに好色です。」

この話を聞いた秦の章華大夫は、「宋玉さんの話はローカルな話であり、秦には遥かに多くの美女がいます。そこである日、私はある女性に節度を守って声をかけましたが、その女性もとても礼節をわきまえた女性でした。私も礼節を守る男だし、私が

目を留めた女性も礼節を守る女性です」と言った。

結局、宋玉は好色ではないとして、クビにならないで済んだ。

★ここでの薫の振る舞いは、これをふまえている。薫の好き心の現れではあるが、勾宮のような色好みではなく、最終的には浮舟がどういう存在であったかを薫は知りたくて、女房たちのもとを訪れていた。